

⑨ 日本国特許庁(JP)

⑩ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報(A) 昭62-270511

⑬ Int.Cl.<sup>4</sup>

識別記号

庁内整理番号

⑭ 公開 昭和62年(1987)11月24日

A 61 K 7/00

7306-4C

審査請求 未請求 発明の数 1 (全5頁)

⑮ 発明の名称 化粧料

⑯ 特 願 昭61-115037

⑰ 出 願 昭61(1986)5月20日

⑱ 発 明 者 豊 田 英 一 横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内  
⑲ 発 明 者 池 田 敏 秀 横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内  
⑲ 発 明 者 池 上 享 子 横浜市港北区新羽町1050番地 株式会社資生堂研究所内  
⑳ 出 願 人 株式会社資生堂 東京都中央区銀座7丁目5番5号

明 細 書

1. 発明の名称

化粧料

2. 特許請求の範囲

卵殻粉末を配合することを特徴とする化粧料。

3. 発明の詳細な説明

〔産業上の利用分野〕

本発明は卵殻を粉砕した卵殻粉末を化粧料成分として配合した新規な化粧料に関する。

〔従来の技術〕

従来、化粧料用粉末としては、例えばタルク、酸化チタン、カオリン、無水ケイ酸、ケイ酸塩、酸化亜鉛、炭酸カルシウム、炭酸マグネシウム、雲母、セリサイトなどの無機粉末、ナイロンパウダー、ポリエチレンパウダー、セルロースパウダー、アクリル系パウダーなどの有機粉末等が目的に応じて適宜用いられてきた。

〔発明が解決しようとする問題点〕

化粧料、特に粉末化粧料が有すべき諸条件として、のび、つき、仕上り、化粧もちなどが良い

ことがあげられ、そのような観点から各種粉末処方方の検討、新規複合粉末の合成検討などがなされてきたが未だ満足のいく状態ではなく、新規な化粧料用粉末の開発が望まれていた。

本発明者らは上記事情に鑑み、新規な化粧料用粉末を開発すべく鋭意研究をかさねた結果、卵殻を粉砕して得られる粉末が高い吸湿吸油性を示し、化粧料に配合した時、油浮き、粉浮きを防ぎ、化粧持ちにも貢献することを見出し、この知見に基づいて本発明を完成するに至った。

〔問題点を解決するための手段〕

すなわち、本発明は、卵殻粉末を配合することを特徴とする化粧料である。

以下、本発明の構成について詳述する。

本発明に用いられる卵殻粉末は鶏卵、うずら卵などの殻をアトマイザー等の粉砕機を用いて粉末化することにより得られる。原料となる卵は、にわとり、うずら、しちめんちょう、あひる、たか、わし、かめ、わに、かものはし等が産する殻を有する卵ならいずれでも用いることができる

が、均質なものが入手しやすいこと等から鶏卵が最も好ましい。また卵は卵殻を得られればその履歴は問題ではなく、生卵でもゆで卵でも良く、さらには孵化後の卵であっても良い。いずれの場合でも、好ましくは卵殻だけを採取し粉碎すれば良い。上記粉碎工程後又は粉碎工程中で、残存する卵殻膜等の蛋白を除去するいわゆる除蛋白工程を加えても良いし、また精製、整粒工程を加えても良い。

本発明に用いられる卵殻粉末の粒径は、0.001乃至1000 $\mu$ が好ましく、のび、つき、ザラザラ感などの使用性面から0.01乃至100 $\mu$ がさらに好ましい。卵殻粉末の配合量は特に限定されないが、一般的には化粧料全量中の0.1乃至90重量%（以下、%という）が好適である。

本発明の化粧料には上記した必須成分に加えて、必要により、化粧料のタイプに応じて、油分、水、界面活性剤、保湿剤、低級アルコール、増粘剤、香料、酸化防止剤、キレート剤、色剤、防腐防黴剤等、通常化粧料に用いられる成分を配

合することができる。

これらの成分の中、代表的なものを例示すると、油分としては、例えばアボガド油、ツバキ油、タートル油、マカデミアナッツ油、トウモロコシ油、ミンク油、オリーブ油、ナタネ油、卵黄油、ゴマ油、パーシツク油、小麦胚芽油、サザンカ油、ヒマシ油、アマニ油、サフラワー油、綿実油、エノ油、大豆油、落花生油、茶実油、カヤ油、コメヌカ油、シナギリ油、日本キリ油、ホホバ油、胚芽油、トリグリセリン、トリオクタン酸グリセリン、トリイソバルミチン酸グリセリン等の液体油脂、カカオ脂、ヤシ油、馬脂、硬化ヤシ油、パーム油、牛脂、羊脂、硬化牛脂、パーム核油、豚脂、牛骨脂、モクロウ核油、硬化油、牛脚脂、モクロウ、硬化ヒマシ油等の固体油脂、ミツロウ、カンデリラロウ、蜂ロウ、カルナウバロウ、ベイベリーロウ、イボタロウ、鯨ロウ、モンタンロウ、ヌカロウ、ラノリン、カボックロウ、酢酸ラノリン、液状ラノリン、サトウキビロウ、ラノリン脂肪酸イソプロピル、ラウリン酸ヘキシ

## 3

ル、還元ラノリン、ジョジョバロウ、硬質ラノリン、セラックロウ、POEラノリンアルコールエーテル、POEラノリンアルコールアセテート、POEコレステロールエーテル、ラノリン脂肪酸ポリエチレングリコール、POE水素添加ラノリンアルコールエーテル等のロウ類、流動パラフィン、オゾケライト、スクワレン、プリスタン、パラフィン、セレシン、スクワラン、ワセリン、マイクロクリスタリンワックス等の炭化水素が挙げられる。

保湿剤としては、例えばポリエチレングリコール、プロピレングリコール、グリセリン、1,3-ブチレングリコール、キシリトール、ソルビトール、マルチトール、コンドロイチン硫酸、ヒアルロン酸、ムコイチン硫酸、カロニン酸、アテロコラーゲン、コレステリル-12-ヒドロキシステアレート、乳酸ナトリウム、胆汁酸塩、dl-ピロリドンカルボン酸塩、短鎖可溶性コラーゲン、ジグリセリン(EO)PO付加物等が挙げられる。

増粘剤としては、例えばアラビアガム、カラギーナン、カラヤガム、トラガカントガム、キャ

## 4

ロブガム、クインスシード（マルメロ）、カゼイン、デキストリン、ゼラチン、ベクチン酸ナトリウム、アラギン酸ナトリウム、メチルセルローズ、エチルセルローズ、CMC、ヒドロキシエチルセルローズ、ヒドロキシプロピルセルローズ、PVA、PVM、PVP、ポリアクリル酸ナトリウム、カルボキシビニルポリマー、ローカストビーンガム、グアーガム、タマリントガム、ジアルキルジメチルアンモニウム硫酸セルローズ、キサンタンガム、ケイ酸Al<sub>2</sub>Si<sub>2</sub>O<sub>7</sub>、ベントナイト、ヘクトライト等が挙げられる。

紫外線吸収剤としては、パラアミノ安息香酸（以下PABAと略す）、PABAモノグリセリンエステル、N,N-ジプロポキシPABAエチルエステル、N,N-ジエトキシPABAエチルエステル、N,N-ジメチルPABAエチルエステル、N,N-ジメチルPABAブチルエステル、N,N-ジメチルPABチルエステル等の安息香酸系紫外線吸収剤、ホモメンチル-N-アセチルアントラニレート等のアントラニル酸系紫外線吸収剤、アミルサリシレート、メンチルサリシレー

## 5

## 6

ト、ホモメンチルサリシレート、オクチルサリシレート、フェニルサリシレート、ベンジルサリシレート、p-イソプロパノールフェニルサリシレート等のサリチル酸系紫外線吸収剤、オクチルシンナメート、エチル-4-イソプロピルシンナメート、メチル-2,5-ジイソプロピルシンナメート、エチル-2,4-ジイソプロピルシンナメート、メチル-2,4-ジイソプロピルシンナメート、プロピル-p-メトキシシンナメート、イソプロピル-p-メトキシシンナメート、イソアミル-p-メトキシシンナメート、オクチル-p-メトキシシンナメート(2-エチルヘキシル-p-メトキシシンナメート)、2-エトキシエチル-p-メトキシシンナメート、シクロヘキシル-p-メトキシシンナメート、エチル- $\alpha$ -シアノ- $\beta$ -フェニルシンナメート、2-エチルヘキシル- $\alpha$ -シアノ- $\beta$ -フェニルシンナメート、グリセリルモノ-2-エチルヘキサノイル-ジパラメトキシシンナメート等の桂皮酸系紫外線吸収剤、2,4-ジヒドロキシベンゾフェノン、2,2'-ジヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン、2,2'-ジヒド

ロキシ-4,4'-ジメトキシベンゾフェノン、2,2',4,4'-テトラヒドロキシベンゾフェノン、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン、2-ヒドロキシ-4-メトキシ-4'-メチルベンゾフェノン、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン-5-スルホン酸塩、4-フェニルベンゾフェノン、2-エチルヘキシル-4'-フェニル-ベンゾフェノン-2-カルボキシレート、2-ヒドロキシ-4-n-オクトキシベンゾフェノン、4-ヒドロキシ-3-カルボキシベンゾフェノン等のベンゾフェノン系紫外線吸収剤、3-(4'-メチルベンジリデン)-d,l-カンファー、3-ベンジリデン-d,l-カンファー、ウロカニン酸、ウロカニン酸エチルエステル、2-フェニル-5-メチルベンゾキサゾール、2,2'-ヒドロキシ-5-メチルフェニルベンゾトリアゾール、2-(2'-ヒドロキシ-5'-t-オクチルフェニル)ベンゾトリアゾール、2-(2'-ヒドロキシ-5'-メチルフェニルベンゾトリアゾール、ジベンザラジン、ジアニソイルメタン、4-メトキシ-4'-t-ブチルジベンゾイルメタン、5-(3,3'-ジメチル-2-ノルボルニリデン)-3-ベンタ

7

ン-2-オン等が挙げられる。

本発明の化粧料の剤型は任意であり、固形粉末系、乳化系、粉末分散系、水-油二層系、水-油-粉末三層系等、どのような剤型でも構わない。

また、本発明の化粧料の用途も任意であり、化粧水、乳液、クリーム、パック等のフェーシャル化粧料、ヘアクリーム、シャンプー、ヘアリンス等の頭髪化粧料、ファンデーション、口紅、アイシャドー等のメーキャップ化粧料やボディ化粧料、芳香化粧料等に用いることができる。

#### 【実施例】

つぎに実施例をあげて、本発明をさらに詳細に説明する。本発明はこれにより限定されるものではない。配合量は重量%である。

(以下余白)

8

#### 実施例 1

(1) 鶏卵殻粉末(平均粒径5 $\mu$ m)	20.0
(2) マイカ	46.0
(3) タルク	11.58
(4) 二酸化チタン	7.0
(5) 酸化鉄(赤、黄、黒)	3.5
(6) ラノリン	5.0
(7) 流動パラフィン	5.0
(8) ソルビタンセスキオレート	1.0
(9) エチルバラベン	0.4
(10) ブチルヒドロキシアニソール	0.02
(11) 香料	0.5

(1)~(5)をヘンシェルミキサーにて混合し、あらかじめ80℃で加熱溶解した(6)~(11)をふきつけてさらにヘンシェルミキサーにて混合する。ついでアトマイザーで粉碎し、篩処理した後中皿に圧縮成型してプレス状ファンデーションを得た。

#### 比較例 1

上記実施例 1 において鶏卵殻粉末をナイロン粉末に替えた他は実施例 1 と同様にして比較例 1 を

9

10

得た。

## 実施例 2

(1) 鶏卵殻粉末(平均粒径10 $\mu$ m)	15.0
(2) マイカ	25.0
(3) タルク	12.5
(4) 群青	20.0
(5) 酸化鉄(赤、黄、黒)	5.88
(6) ラノリン	5.0
(7) 流動パラフィン	5.0
(8) ソルビタンセスキオレート	1.0
(9) ブチルパラベン	0.5
(10) ブチルヒドロキシトルエン	0.02
(11) 香料	0.1
(12) マイカ・チタン系パール剤	10.0

実施例 1 に準じて製造し、アイシャドウを得た。

## 実施例 3

(1) 鶏卵殻粉末(平均粒径20 $\mu$ m)	3.0
(2) マイカ	25.0
(3) タルク	58.95

11

△: 5-9名が使用性良好と判定

×: 0-4名が使用性良好と判定

したことを示す。

また、実施例と比較例の比較の欄の数字は、実施例 1 の方が比較例 1 より使用性良好と答えたパネルの人数である。

第2表から明らかなように本発明の化粧料は、化粧もちが良く、粉浮きしない仕上りで総合的に優れた化粧料であった。

(以下余白)

13

(4) 赤色226号	0.72
(5) 酸化鉄(赤、黄、黒)	1.62
(6) ラノリン	3.4
(7) 流動パラフィン	3.4
(8) ソルビタンセスキオレート	0.8
(9) プロピルパラベン	0.2
(10) ブチルヒドロキシトルエン	0.02
(11) 香料	0.2
(12) 群青	0.69

実施例 1 に準じて製造し、頬紅を得た。

## (評価)

実施例および比較例の評価を実使用テストにて行なった。

実使用テストは女性専門パネル20名を被験者として実施例と比較例の使用性の差を確認した。

結果を第1表に示す。

なお、表中の記号は

○: 15-20名が使用性良好と判定

△: 10-14名が使用性良好と判定

12

第1表

	実施例 1	比較例 1	実施例 1 と比較例 1 との比較
化粧もちの良さ	○	×	20
粉浮きのなさ	○	△	19
つきの良さ	○	○	12
総合的な使用性	○	○	18

実施例 2 および 3 についても実施例 1 および比較例 1 と同様にして評価し、粉浮きがなく、化粧もちの良い化粧料であることを確認した。

## 実施例 4

(1) 二酸化チタン	6.0
(2) タルク	3.0
(3) 卵殻粉末(平均粒径5 $\mu$ m)	6.0
(4) ステアリン酸	2.0
(5) 流動パラフィン	20.0
(6) POE(10モル)オレイン酸エステル	1.0

14

(7) ソルビタントリオレイン酸エステル	1.0
(8) プロピレングリコール	5.0
(9) ポリエチレングリコール4000	5.0
(10) トリエタノールアミン	1.0
(11) ビーガム	0.5
(12) 酸化鉄(赤、黄、黒)	1.5
(13) 香料	0.5
(14) 精製水	残余
常法により乳液状のファンデーションを得た。	

## 実施例5

(1) 群青	12.0
(2) 卵殻粉末(平均粒径10 $\mu$ m)	5.0
(3) 二酸化チタン	3.0
(4) マイカチタン系パール顔料	18.0
(5) カルナバロウ	10.0
(6) 固形パラフィン	5.0
(7) ラノリン誘導体	5.0
(8) スクワラン	21.0
(9) グリセリル-2-エチルヘキサン酸	

15

## 実施例7

(1) 酢酸ビニル樹脂エマルジョン	15.0
(2) ポリビニルアルコール	10.0
(3) オリーブ油	3.0
(4) グリセリン	5.0
(6) 亜鉛華	4.0
(7) 卵殻粉末(平均粒径15 $\mu$ m)	7.0
(8) カオリン	4.0
(9) エチルアルコール	5.0
(10) 精製水	47.0
(11) 香料	適量

常法によりパック化粧料を得た。

## 実施例8

(1) 卵殻粉末(平均粒径3 $\mu$ m)	5.0
(2) 赤色204号	0.6
(3) 褐色203号	1.0
(4) 赤色223号	0.2
(5) キャンデリラロウ	9.0
(6) 固形パラフィン	8.0
(7) ミツロウ	5.0

17

エステル	20.0
(10) ソルビタンセスキオレイン酸	
エステル	1.0
(11) 香料	適量

常法によりスティック状アイシャドウを得た。

実施例4および5の化粧料は、つき、のび、仕上りが良好で、化粧くずれの少ないものであった。

## 実施例6

(1) 亜鉛華	5.0
(2) ナイロンパウダー	5.0
(3) 卵殻粉末(平均粒径10 $\mu$ m)	10.0
(4) タルク	77.0
(5) 流動パラフィン	3.0
(6) 香料	適量
(7) 顔料	適量

常法によりデオドラントパウダーを得た。

このパウダーは吸湿吸脂性、防臭性に優れたデオドラントパウダーであった。

16

(8) カルナバロウ	5.0
(9) ラノリン	11.0
(10) ヒマシ油	44.8
(11) イソプロピルミリスチン酸エステル	10.0
(12) 香料	適量
(13) 酸化防止剤	適量

常法により油性口紅を得た。

特許出願人 株式会社 資 生 堂

18